COLUMN

医療におけるマンガ（アニメ）の効果と可能性

竹宮惠子　京都精華大学マンガ学部

現在，多くの専門分野において，マンガやアニメによる説明資料が作られています。小さな子供にも理解しやすいアニメーションや，長いページに及ぶストーリーマンガとして作られた冊子もあれば，薄くて小さく手軽な冊子，1枚もののチラシ，パネルも数多く見られるようになってきました。なかでも医療の分野は，マンガを用いることの必要性を最もよく理解しているように思います。もっと多くの機会に医療の中でマンガを用い，わかりやすい説明に役立てていただくために，これまでの例を示しながら，その有用性・可能性や効果とともに，より良い資料を作り上げるための努力についてご説明したいと考えます。

▶医療とマンガ ── 機能マンガ研究の始まり

私が京都精華大学でマンガを教えるようになって，最初に持ち込まれたのが脳外科からの依頼でした。医師の一人から，「誰か絵のうまい人が，手術の方法や患者のとるべき体位を，患者やインターンに説明してくれないものか」という要求が生まれたのです。医師のほとんどは解剖学から始めるため，解剖図を描くことなどは当然行っているにもかかわらず，「説明のための図解は専門外」と感じた，ということです。なるほど，そう言われれば，「説明のための図解」には，人や背景や器具，場の説明も必要であるし，器具と人の大きさの関係や動作などにも注意を払わなければなりません。これはマンガを描く人間にとっては，当然クリアすべき日常的課題なのです。逆の言い方をすれば，マンガを描く者ならば，簡単にこの課題をクリアできる，ということになります。

マンガを描くことが専門であるマンガ家はほとんどが文系であり，医学や物理学といった理系の知識は，興味が向くものをかじる程度にしかないと言っていいでしょう。マンガを描く人間はしかし，もともと雑学家であり，いったん描かねばならぬ事柄を前にすれば，まったく知らなかった世界のことにも強い好奇心を示し，学んででも描こうとするのが性分です。完全に理解できてはいなくとも，専門家の指導があれば，「正しい説明」を行うことが可能だというわけです。この脳外科からの依頼は，京都精華大学マンガ学科の講師が脳外科に毎週通い，レジデントからレクチャーを受けて，最終的には数冊の「脳の病気紹介冊子」を作

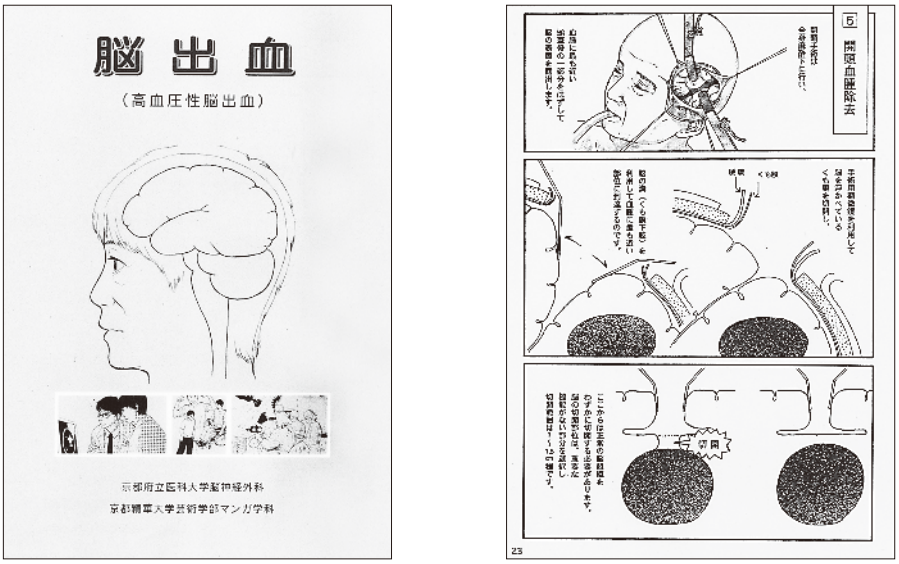

図 1　京都府立医科大学作成「脳の病気紹介冊子」

りました（**図 1**）。

ここから始まった「機能マンガ研究」は，現在もマンガ学科で続けられており，授業への反映も試されています。「機能マンガ研究」とは，マンガの機能を最大限に使いこなして作り上げた冊子などを通じ，マンガの説明機能・浸透機能がどのように発揮され，望んだ結果を得ることができるかを研究するものです。「機能マンガ」という名称は，これまで似た分野として長く用いられてきた“商用マンガ・実用マンガ”と呼ばれる種類のものと区別するために，新たに定着させようとしているものであり，まだ一般に流通している呼称ではありません。なぜこれを区別するのかというと，商用・実用マンガでは，扱うテーマにおける主導権をクライアントの意志が大きく締め，クライアントの注文に従って作られることが多いため，学問的な公平さを保ちつつ，誤解のないように説明を行うことが求められる「機能マンガ」とは，目的も方法も違うだろうと思われるからです。

▶なぜ，マンガを用いた資料が必要なのか

機能マンガの呼び名や研究の進捗についてご報告するのは別の機会に譲るとして，医療の世界ではなぜこうもマンガを用いた説明用資料が必要とされるのか，というところに焦点を当ててみましょう。その理由のひとつには，医師と患者の間の知識の差があまりに大きいと